

長

い名前の会が開催された。その名は「二〇一一年度米山奨学生・カウンセラー・指導教官・地区米山委員会・合同オリエンテーション」と言う。四月二十六日、

秋田市内の秋田キャッスルホテルに米山学友二名を加えて、三〇名が集まった。今年度は九名の奨学生である。財団法人ロータリー米山記念奨学会への年度別・地区別の寄付額によって奨学生の数が決められる。多ければ多いほど奨学生の数も多くなる仕組みである。今年も、アジアの学生だけでなくフランスとトンガの出身者も含まれている。そして今日は、新規奨学生とカウンセラーに対するオリエンテーションであるのだが、カウンセラーに対しては「カウンセラーハンドブック」をお読みくださいの一言で済まされた。こちらは「初めてのカウンセラーですよ」と言いたかったが、周りの方々は何回も経験されているのだから仕方が無い。

土田米山委員長から、新規奨学生に対し「今日からみなさんはロータリーの家族です」との呼びかけと共に、奨学生とロータリーアンとの触れ合いについて話され、更に米山奨学生としての心得が確認され、それぞれの奨学生が確約書に署名をし、提出した。奨学生には、ガバナーより徽章（バッジ）が渡され、すぐに胸に着けた奨学生は

米山奨学生オリエンテーション



（写真を撮る土田米山委員長）

本当に嬉しそうであった。

懇親会が始まり、食事をしながら隣に座った奨学生と例会日や出席の方法、趣味や生活など情報交換が始まる。そして、皆の前で奨学生の自己紹介とカウンセラーの挨拶である。二人の女の子は育てたが、男の子は初めて、である。経験者が話すと、カウンセラーはお父さん、お母さんと奨学生は子どもの関係となるそうだが、「カウンセラーと奨学生は親子の関係です」と言われても実感は湧いてこない。これはカウンセラーの務めが終わってからだろうか。

極、稀にはあるが、過去の奨学生の中には、車を買ったり、両親と旅行に行ったりした者も居たようだが、誤解を招くようなことはして欲しくない。やはり学業に専念すべきであろう。例会に参加し、ロータリーアンと触れ合うことは、奨学生にとっても大学やアルバイト先以外の社会人との触れ合う機会になり、大いにプラスになると思う。そして、多くのロータリーアンに、米山奨学金をいただく感謝の気持ちを伝えることが、後に続く奨学生を多くすることに繋がるのだという自覚を持ってもらいたい。自分達だけでなく、後輩のことも考えられるような人間に育てて欲しい。それを育てるのも我々ロータリアンの努めでもある。なんて言えるのかな？

（ドデシタ）